明日への列車

なぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明日への列車

【Ｎコード】
Ｎ３５９６Ａ

【作者名】
なぐ

【あらすじ】
亡くなった親友に「未来をみつめて生きる」ことを教わる主人公の話。

もう、大丈夫。泣くだけ泣いたから。
見送りに来てくれたおじさんとおばさんに微笑ってみせて、新幹線に乗った。

3時間ほどかかる道のりをどう持て余そうかと考えていると、ガラスに映った黒い服が目に付いた。
窓側の指定席に座り、背もたれに寄りかかってその姿を見つめた。
普段は着ない黒い服。・・・喪服。
初めて着た時よりは、馴染んだように思う。

今日は亜美の命日だった。生涯二度と会えないだろう最高の親友の。

外の景色が動き出した。ホームから出て、町並みの中を走り抜ける。

（・・・東京も変わったなぁ・・・）

一年に一度は必ず来る。
けれど、今は地方に住んでいる自分にはもう縁のない景色。

（あれから、五年・・・かな）

今でも、目を閉じれば昨日のことのように浮かんでくる。
白い病院の、静かな病室の、あのベッドの上にいる、親友―・・・

・・・どうして、あんなに素晴らしい人が
あんなに苦しまなくてはならなかったのだろう。

髪の毛は短くて、真っ黒。小柄なのだけど、いつも堂々としていて。
亜美が言うことには、どこか説得力があって。
出来ることも出来ないことも、ちゃんとこなす、自慢の親友だった。

幼馴染みで、いつも一緒に居た。
亜美が病気になった、あの日まで。

「亜美！」

「あ、和香ー。来てくれたんだー」

いつもと同じ笑顔が、そこにはあった。
昨日教室で見たはずの笑顔が、病院の一室に。

全然、普段と変わらなかった。何が病気なのか解らなかった。
いや、今でもよく解らない。彼女の病気が、なんだったのか。

とにかく、どんどん忘れてしまう病気だった。

過去のことから。数分前のこと、これからしようと思っていたこと。
自分が好きだったアーティストの名前や、飾ってある花の名前。
精神的なものだけではなくて、走り方や、手の動かし方なども。

日が経つにつれ、少しずつ忘れていった。
そして、忘れたことは、二度と思い出さなかった。

私は亜美が忘れたことを、忘れるたびに思い出させようと努力した。
小さい頃飼っていた鳥のこと、初めて行った遠足のこと。
幼稚園や、小学校の思い出・・・。

話している時に、亜美はほんの一瞬思い出しかけたような表情をして、一瞬後には、また忘れていた。

幼かった私は、そういう病気なのだと聞かされた。
細かいことは、言われても解らなかった。

その病気が亜美の命まで取っていってしまうのだと言われたのは、随分経ってから。
亜美が、昔の友達のことを思い出せなくなってから。

そのこと。忘れるといったことに恐怖したのは、その時が初めて。

あんなに仲が良かったのに。
あんなに一緒に遊んだのに。

自分も何時か忘れられてしまうのではないかと思い至った時、私は一晩中泣いた。
どうしようもなく、どうしていいか解らず、ただ声を上げて泣き続けた。

その時初めて、亜美が入院した日に会ったおばさんの目が、真っ赤に腫れていたことが理解できた。
おばさんは解っていた。だからその日に泣いたんだ。

亜美はそのことを知っていたようだった。それは忘れていないようだった。

自分がいずれ呼吸の仕方すら忘れて死んでしまうと知っていた亜美は、どんな気持ちだったのだろう。

いつか私は、亜美に「亜美が死んだら私も死ぬ」と言ったことがあった。

あれは、父の仕事の関係で地方に越すことが決まった日だったと思う。

私は亜美を置いていくなんて考えられなかった。だから、言った。

今思えば、何て馬鹿なことを言ったのだろうと思う。

亜美は静かに言った。

和香。あのね、人は何時いなくなるんだと思う？

私はね、もし私が死んじゃっても、他の誰かが、例えば和香が、私のことを覚えていてくれれば、私はそこにいるんだと思うんだ。

あのね、私は、そんなに長く生きられないらしいの。

でも、長生きしたいの。

だから、和香が私の代わりに長生きして、ずっと私のことを覚えていて。

そうしたら私は、和香の中でずっと生きていられると思うの。

ねえ、和香。

私が死んで、私のことを覚えてくれている和香まで死んじゃったら、私は本当にどこにもいなくなってしまうんだよ。

だからね、和香。ずっと生きてて。

生きて、私を忘れないで。

私のために泣いてくれるなら、私を殺さないで。
その為のお願いを、聞いて。

「私が和香を忘れてしまったら、お父さんのところへ行って」

亜美は、私が引越しを先延ばしにしてもらっていることを知っていた。
父だけが単身赴任のような形で、地方へ行っていた。

「私を忘れないで。でも、私のために前に進まないのはやめて」

そう言って亜美は微笑った。

私はあの顔を、一生忘れない。

その顔に、自分の無力さを教えられた。

自分がここに居たって、何もできないのだと。
亜美が全てを忘れてしまうことを、自分は止められないのだと。

私は泣きたかった。でも、泣けなかった。
一番辛いのは亜美。でも、亜美は微笑っている。

だから、その遺言のような約束のために、指切りをした。

亜美が私を忘れたのは、その翌日だった。
どこかで解っていたのかもしれないと思った。

私は東京を離れ、父がいる岐阜へと引っ越した。
それから暫らくして、亜美が亡くなったと知らされた。
歩き続ける為に止まるのだけれど、
泣いている時は止まってしまっているのだと誰かが言っていた。

だから私は、泣くのをやめた。
亜美のために泣いていいのは、年に一度。
命日に、お墓の前でだけ。

そう決めた。

あとはひたすら、歩き続ける。

私には、亜美しかいなかったから。
亜美と何時までも一緒に居たかった。
いなくなるなんて、考えられなかった。

でも亜美が生きろと言った。
泣くのなら、前へ進めと言った。

だから、初めて亜美のいない明日を見てみた。

寂しくて、静かで、確かに物足りない景色。
だけど、私がいなくなると、亜美を知る人が1人減る。
その分、私しか知らない亜美が死んでしまう。

それなら、生きよう。

朝を迎えてみよう。

新しい朝が来るたびに、また1つ、亜美がいることを実感しよう。

これは亜美が好きだった曲。
これは亜美が好きだった花。
これは亜美が飼っていた鳥。

私が、ちゃんと覚えているから。

何時も考えていると泣いてしまうから、時々だけ考えることにしたの。
決して忘れたりはしないから、大丈夫。

忘れるっていうのは、心を亡くすことだって誰か言ってた。
だったら私は、亜美が亡くしていった心を拾い集めて、大事に持っていよう。

亜美、私はまだ、生きてる。
生きて、ちゃんと生きようとしてる。

新幹線は相変わらず速度を落さず走り続ける。
明日に向かって走る人間は、きっとこんな感じ。

私が乗っているこの席も、明日へ向かうためのもの。
家に帰ればまた新しい日が昇る。
そしてまた新しい記憶が増える。

この列車に乗せてくれたのは、亜美。
だから私は、その切符を失くさないように、大事に持っているの。

それは遺言のような約束。親友とのただ一つの絆。
明日に向かって生きると誓った、もう戻らない、あの日。

列車は速度を緩めず進んでいく。決して後戻りはしない。
それは私も変わらないの。振り向きも、立ち止まりもしない。

ただ真っ直ぐに明日を見て、進んでゆくわ。

さよならは言わないの。まだ別れはきていないから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3596a/

明日への列車

2011年1月25日02時52分発行